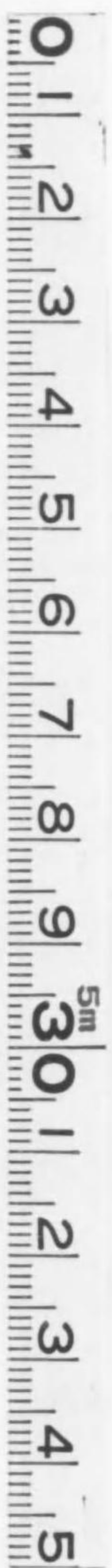
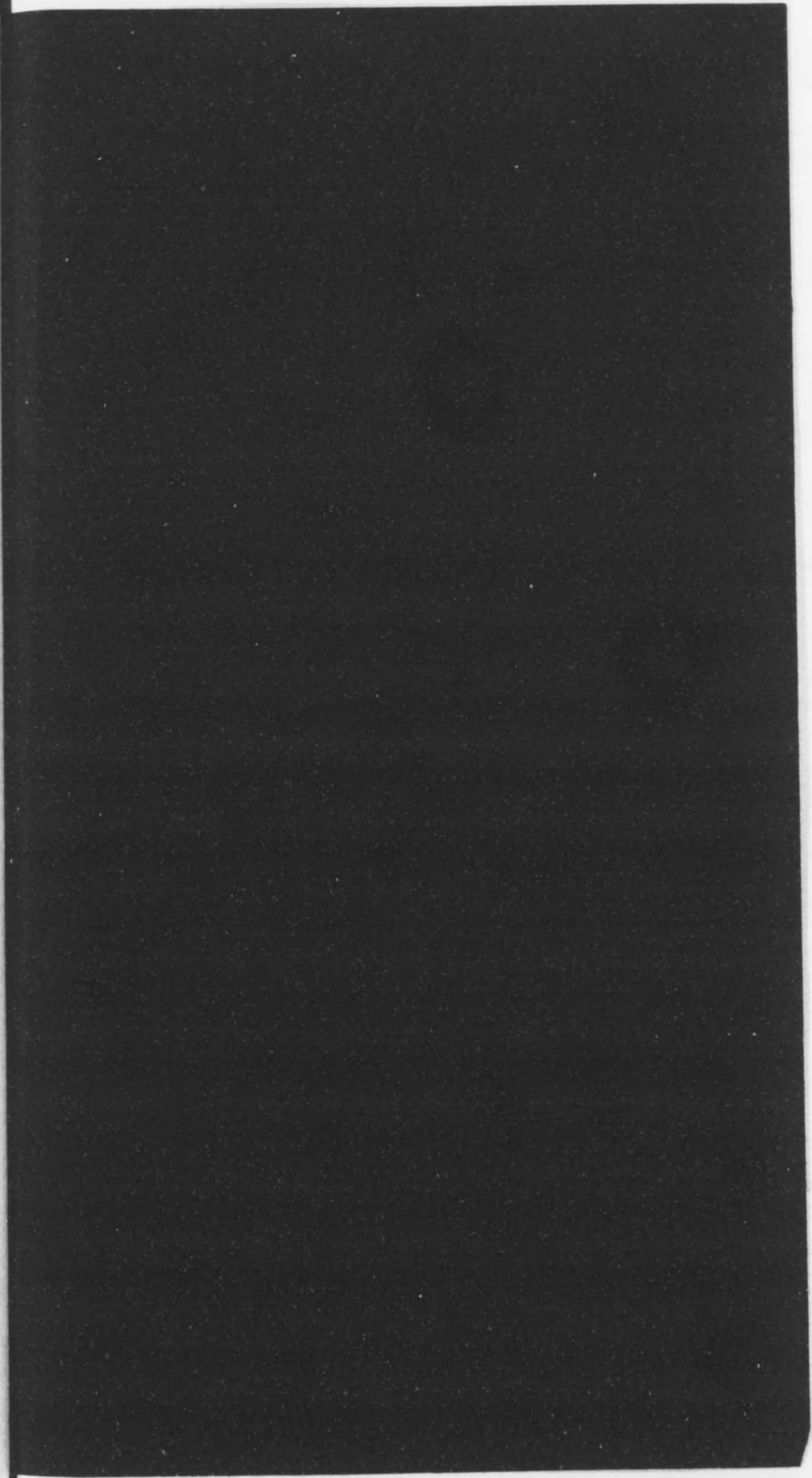
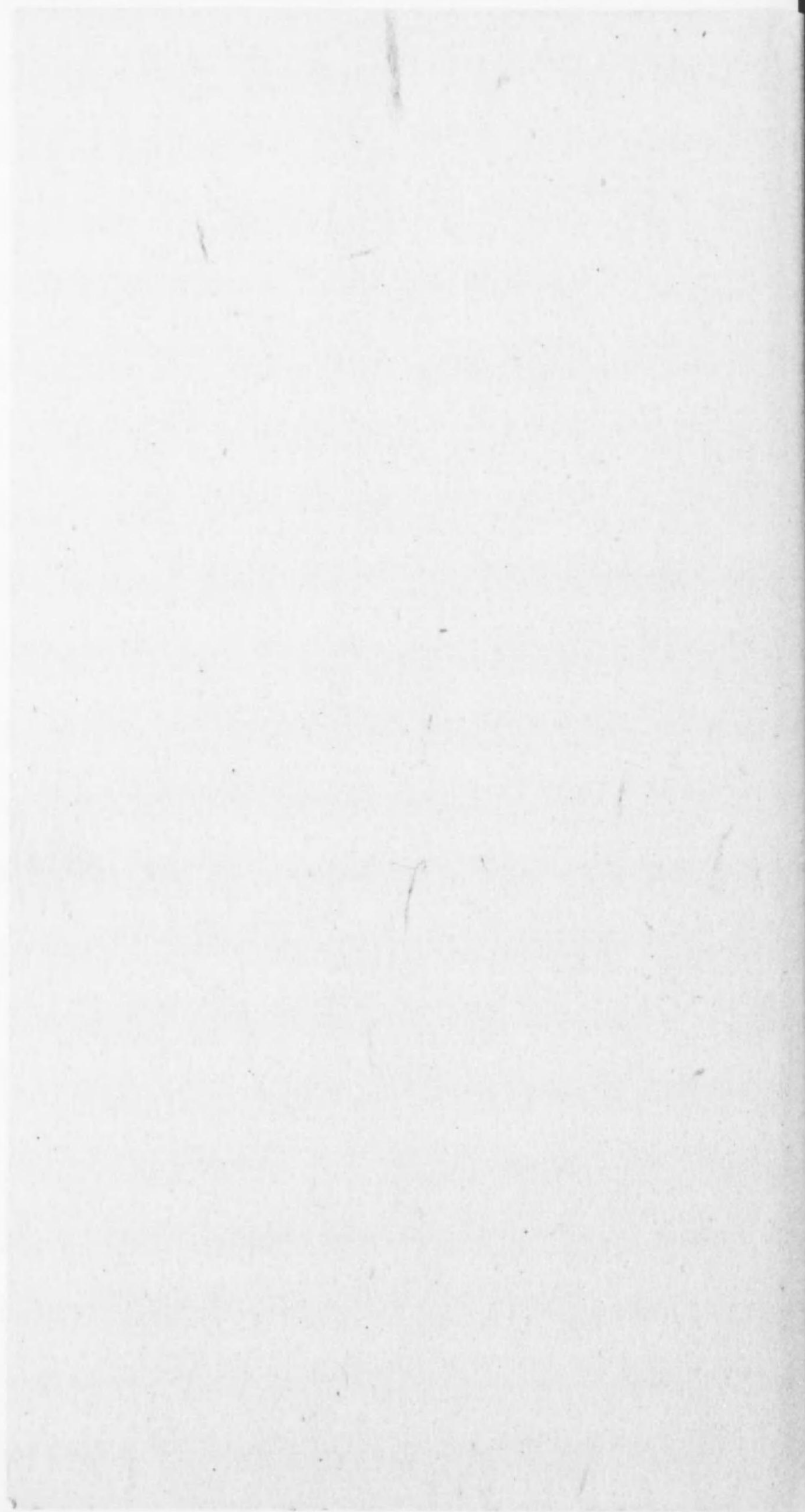


三寶繪解說



始

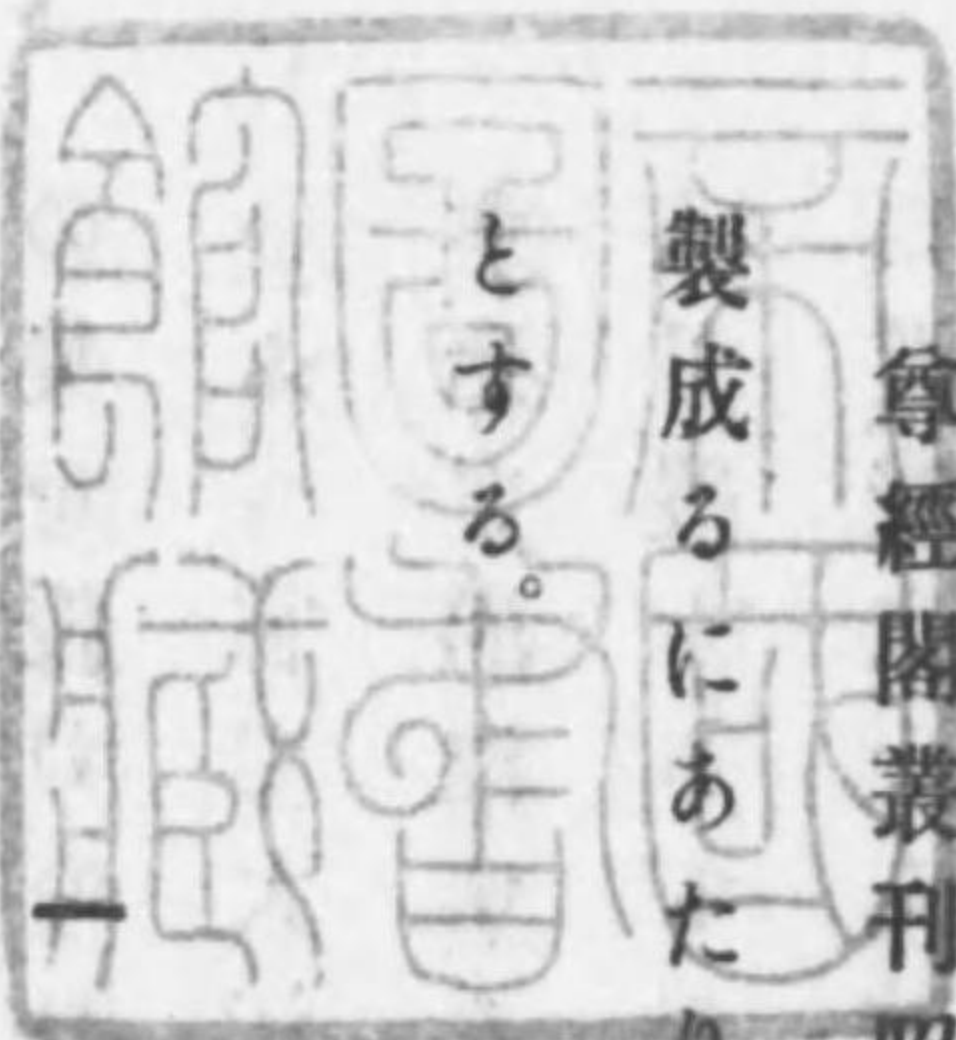




前田本三寶繪解説

發行所寄贈本

池田龜鑑稿



尊經閣叢刊昭和十年年度配本の一として、前田侯爵家藏三寶繪の複製成るにあたり、いさゝかこの書の概要を記して解説に代へることをとする。

三寶繪はまた詞書について三寶繪詞とも呼ばれる。上中下三冊、

永觀二年十一月源爲憲の撰になるものである。

源爲憲は光孝源氏の出、是恒王の曾孫、筑前守忠幹の子、藏人、伊賀守、



式部丞、遠江守等に任じ、其後散位にあること二十年、三條天皇長和三
年、朝に請うて美濃、加賀二國の守に歴任したといふ。學を源順に受
け、詩文をよくして夙に文章生に擧げられ、順の卒するに臨みてはそ
の集を授けられた。常に詩筵に赴くに一囊を携へ、名づけて詩囊と
いふ。嘗て大江以言の詩を講ずるを聽いて、頭を囊に入れ、吟賞已ま
ず、殆ど涕泣するに至つたといふ。古今著聞集、大日本史列傳 扶桑名畫傳に寛弘八年
八月歿とあるが、その根據は明かでない。著はすところ、本書以外に
口遊、空也上人誄、世俗諺文、本朝詞林(巻)、法華經賦(巻)、等があり、その詩
は本朝麗藻、善秀才宅詩合、類聚句題抄等に見えてゐる。爲憲はその
逸話をもつても知らるゝ如く、眞に熱情の人であつた。出でては地

方官として能治の稱を得、京に在つては詩文家として令名高く、一面
學者であると同時に、他面熱心なる宗教人として重きをなした。

三寶繪の成つた永觀二年は、あだかも源信が往生要集を起草した
時であつたが、後、その書が宋の天台山國清寺に送られた際、前進士爲
憲作法華經賦も同じく托送されて、爲憲の信仰文學は海外にまで達
したのである。この賦は佚して、今その面影を偲ぶよすがもないが、
なほ信仰家爲憲の面目は右の一事に躍如としてゐるのみならず、更
に三寶繪詞の内容によれば、彼の心事の一層明瞭に浮き出るのを見
るのである。

著者は三寶繪制作の由來をその總序に叙してゐる。その大意を

いへば、冷泉院二宮尊子内親王、この度び五濁の世を厭離遊ばされ、寂寥の御生活にあらせられるを以て、かつは御消閑の具ともなり、かつは御鞭韃の縁ともなるやう、畫人をして繪を描かしめ、自ら文を加へて、これを御左右に奉るといふのである。大鏡卷五に、

花山院の御いもうとの女一宮はうせ給ひにき。女二宮は圓融院の御時の齋院にたせ給ひて……圓融院の御時の女御に参り給へりし程もなく内の焼けにしかば火の宮と世の人もつけ奉りき。さて二三度まゐり給ひて後程もなく失せさせ給ひにき。この宮に御覽ぜさせむとて三寶繪は作れるなり。とあるのによつて大體の事情を察することが出來よう。

尊子内親王の御傳は、日本紀略、小右記、賀茂齋院記、帝王編年記等に見えてゐる。村上天皇康保三年御誕生、三歳にして齋院とならせ給ひ、十歳の御時、御母藤原懷子薨じて退出し給うたのである。御年十五歳、天元三年十月二十日、圓融天皇の後宮に入り、入内後いくばくもなく祝融に會ひ給うた。即ち同年十一月二十二日、賀茂臨時祭の日、主殿寮より出火して諸殿悉皆焼亡したのである。同五年四月三日、入内一年半をもつて退出遊ばされ、而して間もなく御落髮の御事があつた。小右記天元五年四月九日の條に、

傳聞、昨夜二品女親王承香殿不使人知密親切髮云々、或説云、邪氣之所致者、又云、年來本意者、宮人祕隱、不云實誠、早朝義懷朝臣參入、令

奏此由云々、又云、是非多切、唯額髮許云々

六

とある。なほ慶滋保胤の爲二品長公主四十九日願文本朝文第十四文によれば、時日等に疑問があるけれど、叡山座主良源について入道遊ばされたことになつてゐる。寛和元年五月一日、御歳二十歳をもつて薨ぜられた。

三寶繪の作られた永觀二年は、右の宮の御退殿御落飾後、翌々年に當つてゐる。若くして文の道に遊び、老いて法の門に入つて九品蓮臺を憧れた爲憲は、もともと恩を戴けること山よりも高く、志を懷けること海より深き宮人であり、その誠忠の志はやがて本書制作の根本動機であつた。薄倅の宮の御發心間もなきに、ひそかに萬斛の憂

を衷に藏して、丹誠を凝らし、要文を集め、將來永かるべきその御佛門生活への御贈物として献られたのが三寶繪であつた。この點よりして、三寶繪は御消閑の具としての美術品でもあり、また同時に新發意に讀まるべき佛教讀本でもあつたと言へるであらう。

二

以上の如き制作事情は、本書の文献としての價値の根據をなし、更にその記事内容をして一層光輝を放たしむる。また右の如き成立事情よりして、佛教説話集としての形態の規定された點は特に注意を要する所である。

七

わが國に於ける佛教説話文學の發達を見るに、上は日本靈異記、下は今昔物語を以て兩端となすことが出來よう。然るに三寶繪詞は日本靈異記と今昔物語との中間に現れ、正に兩者を結ぶ地位にある。この三者の相互關係は種々の點から觀察されるが、これを概括していへば、(一)三者に存する共通話譚の關係を見るに、三寶繪詞には靈異記より引用せられ、今昔物語には右の兩者より引用されてゐる。(二)内容組織の發達を見るに、説話の内容性質による分類と綜合とが三寶繪詞に於て見られ、今昔物語に於てその深化と擴大とを認め得る。(三)文體の推移を見るに、靈異記は漢文によつて記述され、三寶繪及び今昔物語は假名文によつて記述されてゐる。

三寶繪詞が後代に及ぼした影響については、今昔物語に於て、最も深く且つ大なるものが認められ、單なる素材の提供に止まらず、形態上、内容組織上に於ても亦兩者に密接なる關聯を認め得る。その他平安末期から鎌倉期に簇出した説話集の類の上にも、本書の影響は或る程度までこれを認める事が出来る。また、本書が制作以來室町時代に於けるまで、かなり廣く世に愛讀されたものであるらしいことは、大鏡、扶桑略記、袖中抄等を始めとして、實隆公記、太子傳、玉林抄等に至る諸書の引用振からみて大體察せられるところである。なほ、鎌倉時代に於て「新三寶繪詞」と題する佛教説話書が現れてゐることも特記せらるべき事柄である。

三寶繪が世に珍しき記事に富み、わが文學、美術、佛教乃至一般文化史の上に幾多の貴重なる資料を提供するものなることは、已に多くの研究者の指摘したところである。試みに二三をいへば、下卷に於ける法華寺華嚴會の條は、雛祭の起源に關し、風俗史上興味ある問題を提出するものであり、中卷に於ける法華讚歎、下卷に出づる百石讚歎は、いづれも現存するそれらの記載のうち最も古きものであつて、歌謠史上緊要の史料である。また文學史研究の立場からその一つを拾へば、本書序文に於て散佚物語の名を出すこと四、そのうち「い

まり

しきの中將〔前田本、今條につくる〕「長居の侍從」の二は、顯註密勘所引源信の勸女往生義にも出すところであるが、更に本書によつて存在の確實性を増したものであり、また「伊賀のたうめ」「土佐の大殿」に至つては、新なる名を古物語の目録に加へたものである。更に本書に見える訓點は、日本靈異記のそれと相並んで、國語學上の資料として重んずべきは、早に學者の指摘した所である。また下卷、春夏秋冬の佛會、行事の解説は、類書の乏しい關係から、その方面に特に重んぜられ、全篇殆ど金玉の文字の感がある。更にまた、記事の部分的内容を離れて、三寶繪をその全容に於て考察すれば、そこに別種の重要な意味が續々見出されて來る。三寶繪が我國の繪卷物發達史上特に重要な地位

を占むべきものであることは、この書に關する最初の研究發表中川氏、

豊、明治四年一月四に於て力説されたところである。その他本書について考へ

ねばならぬ問題は甚だ多く、到底こゝで云ひ盡せるものではない。

今はその中の一二について略叙するに止めたのである。

四

三寶繪詞は傳本甚だ稀である。前田家藏本を別にしては、關戸氏藏本と東寺觀智院藏本とが數へられるのみである。而してこれ等の三本はそれぞれ獨特な特色を有して相對立するものである。

關戸氏本は冊子一冊、墨付百枚の零本であるが、その斷片は所謂東

大寺切であつて、諸家の藏するところとなつてゐる。關戸氏藏冊子

本の内容は首尾完備するものではなく、剪裁の跡の著しいものであるが、最後に原型の下帖奥書があつて、

保安元年六月七日書うつしおはりぬ

と見えてゐる。その體裁をみると、優美な雲母模様を置いた唐紙を用ひ、薄墨にて堺を引き、僅かに漢字を交へた草假名をもつてまことに美事に書きなされたものである。東大寺切は古筆名葉集に、

東大寺切 四半縁起カナ交り白カラ帯地墨罨

とあり、古來源俊頼卿の筆蹟の標準とされて來たものといふ。かかる名物も遺憾ながら大部分が既に剪裁、散佚の憂目にあひ、關戸氏

藏本の分量は全體の凡そ三割、知らるゝ限りの東大寺切と併せても全體の三分の一をあまり出ない有様である。

觀智院に藏するものは三冊、下帖奥書に、

文永十年八月八日後日未刻書寫了

とある。本文は漢字片假名交書で、上帖はこの時代の寫本に往々見られるところの宣命風の假名小書雙記の體裁になつてをり、中下二帖に於ては、やゝ亂れて互爾乎波のみを小書した程度になつてゐる。この本は明治四十三年八月國寶に指定され、三寶繪傳本中代表的に用ゐられてゐるものであるが、上帖末に約一紙の缺失があつて惜しまれてゐる。

前田家本は、從一尺一寸、横七寸八分、五代松雲公の意匠になる鮮かな光明朱表紙の左端上に「三寶繪（中下）」なる題簽を附した袋綴三冊本で、料紙は別漉のものである。文章は日本靈異記に類似した準漢文體で、歌謠等は眞名書とし、間々送假名の施してある所もあり、その送假名には古體の片假名も散見して、訓讀研究上有力な資料を提供してゐる。下卷奥の松雲公自筆の跋に、

右三寶繪三卷者釋迦院前大僧正有雅所藏也乙未之夏借其舊本而覆摹之遂加再校以收書庫云

正徳五年六月中泮

養民堂主人識

とある。即ち、この本は、松雲公が、正徳五年釋迦院前大僧正有雅所藏

本を影摹せしめられたものである。その影寫は、慎重な一點一畫の書きやうといひ、精細な蟲害の寫しやうといひ、頗る原本に忠實ならんことを期したものである。

大僧正有雅は東密三十六流中、松橋流第二十一世の正統で、延寶六年八月東寺百八十二代の長者法務に補せられ、貞享元年四月まで六年間任にあつた人である。証言宗承譜、眞言宗東寺長者次第當代に於ける學匠で、新義眞言の學僧とも交渉の深かつた人といふが、その傳記は委しくない。次に釋迦院であるが、これは醍醐寺塔中として存在した釋迦院を指すものと思はれる。山城名勝志卷十七に、

釋迦院在西谷、今云報恩院

とあるが、現在西谷には存しない。「今云報恩院」といふが、元來報恩院は下醍醐にあつた寺で釋迦院とは別である。しかしながらこの兩院は特別密接な關係にあつたものらしく、名勝志同卷報恩院の條に「今云釋迦院」とあつて、各々の院號が共通に用ゐられてゐたらしい。明治五年に西谷釋迦院は廢止されたのであるが、文部省、寺院明細帳、報恩院の條による現在でも報恩院の別名として釋迦院の稱は残つてゐるのである。察するところ、有雅僧正は晩年この醍醐山西谷釋迦院に隱棲されたのであらうか。有雅の長者職を辭した貞享元年から前田家本の寫された正徳五年までは三十一年の隔があるが、跋に前大僧正とあるのを見れば、この時既に有雅は釋迦院の人ではなかつたわけ

ある。

さて前掲跋文の直前にある原本の奥書に當るものを見ると、
寛喜二年宣統四月九日未刻於醍醐山西谷書寫了

欣求菩提沙門叡賢七十七年

とある。即ち、原本なる有雅所藏本は寛喜二年にこの西谷で書寫されたものであつたのである。但し叡賢の傳は詳かでない。

この寛喜本の行方は現在不明であるが、嘗て醍醐寺に存在したといふことには證據がある。明治二十九年五月發行の醍醐寺什寶品

目上第一輯に、
下第二輯に、

三寶繪

壹册

奥書云源爲憲撰寛喜

二年寫叡賢裏具注曆
と見えてゐるので、これによつてとにかく一册は近時まで醍醐寺に存したことが知られるが、今日ではその一册すらも見當らず、遺憾千萬のことであつた。然るに幸なことには寛喜本の完全なる影摹本として前田家本が嚴存する。しかも前田家本は完本であり、かつ慎重な用意の下になれる影摹であつて、よく原本の面影を髣髴せしめるのである。この書の現存することは、眞に學界のために慶賀すべきことである。

五

以上は繪詞傳本の状態についてのべたのであるが、こゝに注意すべきことは三本の間に着しき形式的相違の存することである。即ち一は平假名書、一は片假名交書、一は準漢文體の漢字書のものであることである。かくの如き相違は如何に解釋すべきであらうか。前田本に關する考説としては、漢文草案説がある。その根據は、叙岳要紀の記載にある。即ち

傳教大師父三津首百枝本緣起大外記中原師重云百枝昇進事
日本紀所未見云々

其父後漢孝獻帝孫高萬貴王子也乘船浮浪遊海上大日本國輕嶋
明宮御宇應神天皇第卅年近江國志賀郡化來年百餘歲也始賜姓

爲三津氏其名謂百枝應神天皇第九女爲妻仁德天皇第十年壬戌始
賜位階爲正五位同天皇第廿年辛未叙正四位顯宗皇帝第三年丁卯於
志賀草屋取田中泥土造長三尺比丘之形人見之成怖畏之思仁賢
天皇第五年壬申叙三位兼近江守宣化天皇第三年戊午賜水田卅町被
充其所食欽明天皇御宇兼酒守同年自欽明天皇經卷佛像ヲ給深
習學之无他念所造泥土僧行百枝ヲ始致禮拜有無量光明此時彌
知有佛法同廿六年乙酉聖德太子見此佛像成怖畏備香花燈明供養
致禮拜恭敬數百返文殊彌勒普賢ノ定三菩薩
私云聖德太子者用明天皇御子也敏達天皇卽位二年正月一日
御誕生也何欽明天皇廿六年見件佛像哉太不審也

推古天皇十四年^丙以三位三津氏百枝爲大藏卿聖德太子講勝鬘
經聽聞彌發堅固菩提心同天皇第十九年^辛勤操僧正奉妙法華
經讀誦通利敢不廢忘人呼之曰法華百枝尋此人由來如來在世有
王謂妙莊嚴王也有夫人淨德夫人是也有太子兄淨藏弟淨眼結契
日我生々世々有弘經利物誓願汝達同意可弘法華經以淨德夫人
爲妻以淨藏爲一子以弟淨眼爲化人子相謂畢遂妙莊嚴王成唐高
萬貴王子日本國化來淨德夫人爲妻今應神天皇第九女是也神
護景雲九年^丁祈神宮院最澄禪師誕生七歲學超諸倫十二近江國
師大安寺行表ヲ以爲師範受學經卷年十五出家受戒廿進受具足
戒最澄禪師弟淨眼肅宗皇帝子鬱鷗輕彥篁哀之成真子遂最澄禪

師ノ爲御弟子延曆廿三年同爲傳法遠入唐數千餘經卷佛像道具
ヲ傳來昔嚴王即今百枝是也應神天皇第九女即昔淨德夫人是也
最澄禪師昔淨藏也弟子義真禪師昔淨眼也最澄成長之後夫妻不
知行方^{已上}

沙羅樹王佛光照莊嚴相菩薩藥王藥上四菩薩互助行化成凡夫弘
法花實四聖前緣是也^{已上}

源爲憲撰三寶繪草案中在之又尊敬記同之

私云大外記中原師重云百枝二讀也一ニハ百枝一ニハ百枝然
者不可讀枝云々^{建保六年夏開之} (群書類從卷)
四三九上

といふのである。叡岳要記の撰時は明かでないがこの記事は末

尾に「建保六年夏聞之」と註してあるから、凡その標準をそれに取つてよからう。大外記中原師重はやはりその頃の人で、尊卑分脈には年を記さないが、續群書類從所載中原系圖には「承久三七十一卒」とあり、これによると建保六年は彼の六十八歳の時に當る譯である。

漢文草案の説は、右條末の「源爲憲撰三寶繪草案中在之」の文句によつて、少くとも草案本と清書本との二様が世に行はれたことが察し得られ、その所引の記事は東寺本には見當らず、要するに草案本は漢文で、清書本は假名交りであつたのであらう、出典の漢文を翻譯することが三寶繪詞の主な目的であつた點から見ても、さう考へるのが妥當であらうといふのである。

右の説は或程度まで認められるやうではあるが、それに對する疑問説もまた提出されてゐる。その要旨は右の叡岳要記の記事が甚だしく杜撰なもので、繪詞の内容と矛盾する點も多く、結局源爲憲撰三寶繪草案といふ事實を、疑問のまゝ認めしておくといふに止まるのである。

さて右兩説に關し、百枝本縁起の條に該當する記事が、もし三寶繪傳本中のいづれかに存在するならば、問題は簡單に解決するかも知れないが、現在では他に見當らないものである。然るに一方該記事はその筆者が途中で疑つてゐるほど、杜撰極まるものでもあつて、そのまゝ認められ得るものではないやうである。かうした疑點につ

いては、叡岳要記そのものの究明によつて解決しなければならぬのであるが、今はその暇がない。

右の「三寶繪草案」なる事實の存在を重んじて、假に草案本、清書本の二種が世に行はれたものと認めるとしても、その草案本が果して漢文であつたらうと定めるについては、繪詞の大部分が漢文の翻譯なるが故にといふ理由以外に、今の所積極的に何等の根據をも見出すことは出来ないやうである。もし草案本が漢文體であつたとすれば、その原典たる經典とか、靈異記とかを抄出する際に、きはめて便利な事情があるやうにも思はれるが、果してしからは、準漢文體たる前田家本の形式、内容とはかなり隔つたものとなる譯であつて、この説

にも多難の感が少くない。

最後に草案本はともかく、清書本の體裁は如何であつたであらうかといへば、三寶繪が詞書に優美を要求する美術的作品であつたことから見ても、著者の献上した高貴の御方が女性であらせられたことから見ても、草假名書とするのが寧ろ當然であらう。たゞ草假名書たる關戸氏本は、零本にすぎず、これを以て全貌を推すことは出来ないであつて、やはり片假名交書たる觀智院本を中心とせざるを得ないのである。しかるに既に觀智院本には誤脱が少くなく、到底それのみによることは出来ないのであるから、こゝに於て、前田本は必須の参考書となさるべく、この本の有する學術上の價值は頗る高

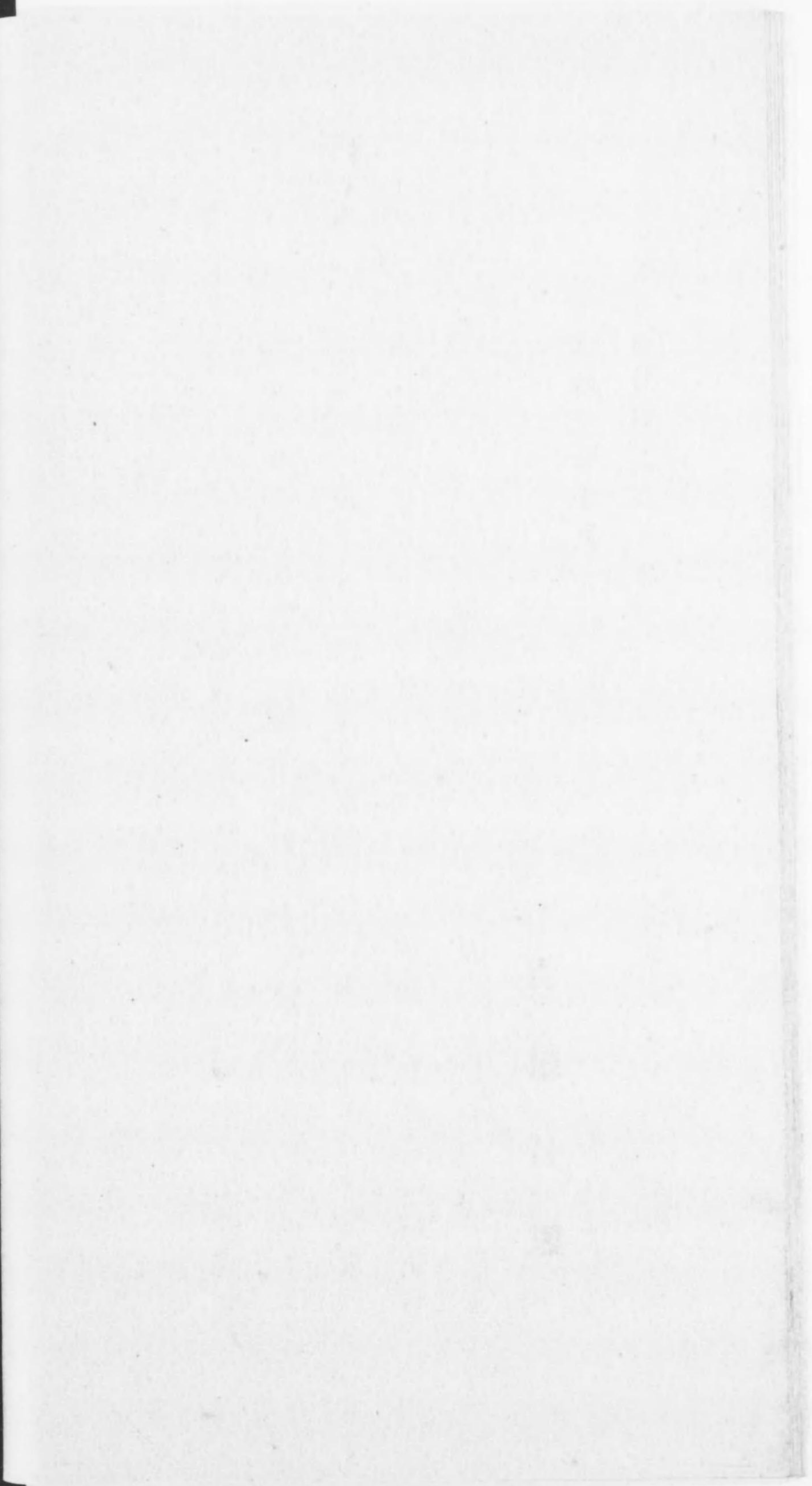
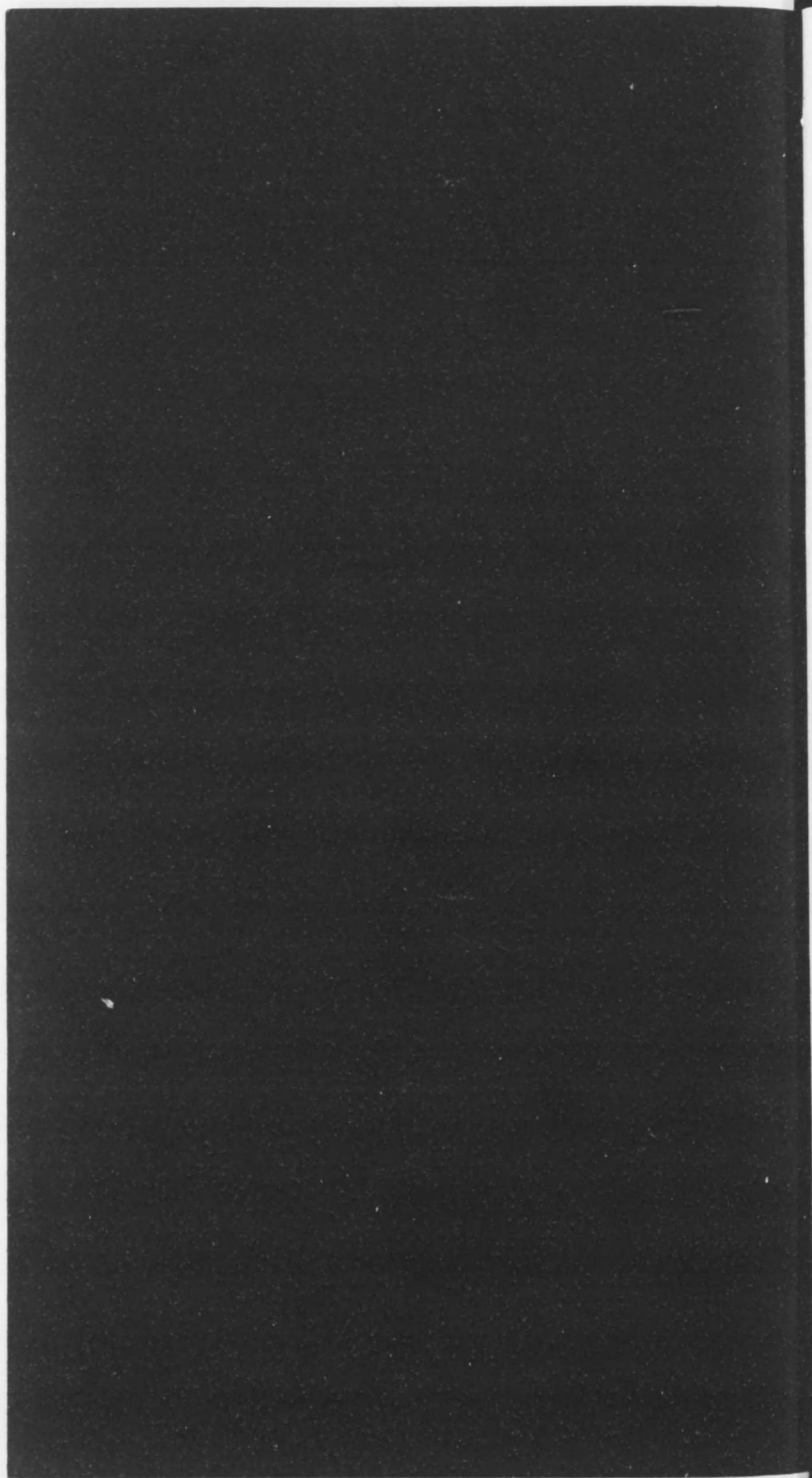
300
54₄

いとしなければならぬ。

昭和十年七月

育徳財團

育徳財團の設立は、教育の普及と、社会の発展を目的として、昭和十年七月に設立された。この財團は、教育の普及と、社会の発展を目的として、昭和十年七月に設立された。この財團は、教育の普及と、社会の発展を目的として、昭和十年七月に設立された。この財團は、教育の普及と、社会の発展を目的として、昭和十年七月に設立された。



終